少女博徒
－手本引地獄－
SMX工房
濠門長恭
presents

目次

１．ジャンスカ八重子 ..... - 3 -
２．処女花無惨 ..... - 40 -

目次単位で「しおり」を挿れてあります。
ＰＤＦ閲覧の際に、ご利用ください。

１．ジャンスカ八重子

賭場が開いて三時間。これからが佳境にはいる頃合のはずなのに、どことなく疲れた空気が漂っていた。

畳を縦にならべて晒し布を張った盆莫蓙（ぼんござ）の中央に、張り方と向かい合う形で開襟シャツの胸をはだけた男が座っていた。この街に進出してきたばかりの関西大手デパートの副店長だった。

副店長は左肩に掛けた半纏の中でもごもごと右手を動かしてから、膝元に置いた二つ折りの手拭（かみした）の中に豆札を隠した。

「張ってください」

副店長の両側に控えている合力(ごうりき)が、十人ほどの張り方に声をかけた。

「サンゲン、サンゲンと来て……今度は奥か手前か」

「いや、三々九度ってのもあるぜ」

「まさか……いや、押さえとくか」

かたまって座った三人が、胴の膝前にならんだ六枚の目木（めもく）と副店長の顔色とを交互にうかがいながら、相談をしている。

胴が一から六の数字札を選び、張り方がそれを当てる。ただそれだけの単純な博打だが、運の要素がほとんどない実力勝負。博打の終着駅とされている。

目木は張り方から見て、左から二五六三一四の順にならんでいた。直前の出目は二で、その前は五という意味だ。目木は位置によって名前がつけられている。根っ子、小戻り、サンゲン、シケン、フルツキ、大戻り。三々九度と洒落た男は、つぎもサンゲンだから出目は六と予測したわけだ。

目木のどこを引くか。手前の四つから選ぶか奥の四つからにするかが、駆け引きの基本だ。手前が悪かったから奥へ移動するか、あえて手前を続けるか。一二一二と続けてから、意表をついて六へ飛ぶか。張り方は、そういった親の心理を推測する。

手本引とは、胴と張り方との心理合戦なのだ。初心者は豆札を繰る手つきで出目を読まれてしまうこともあるが。

張り方が、裏向けた張り札を思い思いに盆茣蓙の上へならべていく。基本は四枚を三段の山形にならべる。天辺（大）が当たれば、配当は掛け金と合わせて２．２倍。その下(中)は１．６倍。底辺にならべたツノとトマリは、

０．９倍と０．８倍で張り方のマイナスになる。張り札を縦に置くか横に置くかで配当が変わるし、二点張り（ケッタツ）や一点張り（スイチ）もあるが、配当の合計は常に５．５倍。出目は六通りなのだから、０．５倍だけ親が有利になっている。この有利は寺銭になるのではなく、親の利益だ。寺銭は、ルール上で有利な親が儲かったときだけ、浮きの５パーセントを収める。一回ずつの寺銭はわずか（公営競馬では売り上げの２５パーセントだ！）だが、同じ金が何十回もまわるのだから、ひと晩の水揚げは大きい。

「ええい、分からん」

六枚の張り札をシャッフルして、適当にならべる者もいた。張り方にだけ許された手段だった。

「はい、お手を止めてください」

張り札がそろったところで、合力が声を掛ける。

「勝負！」

副店長は目木の一番奥にある四を取り上げて、左端へ持っていった。カミシタを開けば、とうぜんそこには四。最後に、手持ちの豆札五枚を盆莫蓙にならべると、五六一二三の順になっていた。

手本引が心理合戦である以上、胴は出目（ツナ）を分かっていなければならない。目木と出目が一致することは無論、適当にシャッフルしたのではない証しとして、残りの札も順番になっていなければならない。手持ちの豆札が乱れていれば『ツナもつれ』で無条件に胴の負け。

「へへっ……」

相談し合っていた三人は、そろって大の札を明けた。あの短い会話の中で副店長の表情がどう動いたかを読んだのだろう。他にも、いいところが何人か開いた。札をシャッフルした男は手元に残した札を見て、ガサッと張り札を引いた。

負けた張り方から合力が掛け金を掻き寄せ、開いた札に配当をつけていく。

「もう、あかんわ。洗わせてもらいまっさ」

副店長は膝元に残ったわずかな金をつかんで立った。

「はい、おつぎに立たれる方は？」

合力がうながしても、誰も胴に立とうとしない。賭場には三十人ほどの客がいたが、盆莫蓙についている十人は、まだ損失の少ない組で――ほかの客は胴に立つ都度に、若旦那としか名を知らない男につぶされて、元手を

半分以下に減らしていた。
　その若旦那は負け組から離れたところでひとり、八寸をつつきながらビールを飲んでいるのだから、再戦の意思はなさそうだった。
「それじゃ、ここいらで趣向を変えさせてもらいましょうかね」
　盆莫蓙からはなれて上座に陣取っていた五十絡みの坊主頭が、低いが宴会場の大広間全体にとおる声で言った。坊主頭の前に置かれた小机には、手提金庫や帳面が乗っている。この賭場を仕切っている貸元、安岡組四代目の安岡和夫だった。
「お嬢ちゃん、出番だよ」
　かたわらの若い衆が横の襖を引き開けると、そこに少女が正座していた。斜め後ろには、白い麻の背広を着こなした角刈りの男。
「貸元の胴をつとめさせていただきます、倉内八重子です」
　突き刺さるおおぜいの視線に物怖じした様子もなく、少女はしっかりしたアルトがかった声で挨拶をした。
「ジャンスカ八重子じゃねえか」
　客のあいだから、そんな声があがった。
　少女が着ているのは、名門女学校の校章が刺繍されたジャンパースカートだった。もっ

とも、それは箔づけのためで、そこの生徒と同年代という以外に、少女は女学校となんの関係もない。素肌の上に着ているのだろう、肩が剥き出しだった。
「ジャンスカ八重子は、友部組の秘蔵っ子じゃないのか」
「馬鹿、安岡組は兄貴筋にあたるんだ。出張って来ても不思議はねえよ」
　客のささやき交わす声の中を進んで、盆莫蓙の前に少女は座った。少女に付き従っていた角刈りは盆莫蓙にはならばず、大広間の下座に控えた。
　少女の両側には合力がひとりずつ。盆莫蓙に付いている客は十人ほどだったが、お手並み拝見とばかりに数人が加わってきた。
　卵形の顔に小さな目と鼻。その造作につりあって、小ぶりだがぷっくりした唇。長い髪を真紅のリボンで束ねた初々しい少女の顔が、きゅっと引き締まる。
「五百万円の胴」
　ヒュウと、誰かが口笛を吹いた。宣言した少女の声も、かすかに震えていた。大学卒の初任給が一万円そこそこの時代の五百万円だ。八重子が世話になっている友部親分の下でつとめた胴は、二十万からせいぜい五十万。代

打ちのひと晩の勝ちは見せ金の半分までという親分の方針で、大勝ちする前に場を洗わされてしまう。それに少女の役目は、今日のように客がだれてきたときの賑やかしだから、出番も少ない。勝ち金の三割が取り分では、二百万円の借金を返済するには何年もかかる。
（ここなら……）
「好きなだけ、巻き上げてくれていいぜ」
　機嫌よく安岡は受け合ってくれた。うまくいけば、一気に半額くらいは返せるかもしれない――宙を見据えて、八重子は思った。まだ、盆莫蓙に目を落とす勇気が出ない。盆莫蓙の上には、紙幣を半分に折って十枚ずつを輪ゴムで束ねたズクが散らばっている。ふつうはズクひとつが一万円。どうかすると百円札のズクもあるが、それでも職人の日給よりは額が大きい。ところが、この鉄火場は。ようやく出回り始めた一万円札のズクだった。その一束で、五人家族が半年は暮らせる。
　ふうっと大きく息を吐いて、八重子は右肩のホックをはずした。身頃がはらりと前後に垂れて、掌におさまりそうな乳房が男どもの目に晒される。エロチシズムというよりは、いたいたしさが先に立つ光景だった。
　おおっというどよめき。視線を一点に受け

て、乳首がしこっていく。見物客が、どっと増えた。
　合力が半纏を八重子の肩に掛けた。乳房を晒した右にではなく、左に。
　もう一度深呼吸をして、盆莫莚に目を落とす。
「未熟者ゆえ、唄いチガイなどありましたらご容赦のほどを」
　形どおりに口上を述べて、目の前に置かれた新しい豆札を手に取った。帯封を切って、花札をひとまわり小さくした六枚の札を場に撒き、たしかに一から六の数字であることを示す。それを順番に重ねて、右の掌に隠す。
「嬢ちゃん、なんだったら両手を使ってもかまわんぜ」
　そんな声は無視して、八重子は半纏の中で右手を動かした。三枚をまとめて親指で押し上げて、札の下へまわす。つぎも同じ動きで三枚。一番上の豆札は一に戻った。膝の前に置かれたカミシタを取り、一番上の札を入れてから盆莫莚に戻す。
　ほう……。堂に入った手つきに嘆声を漏らす客もいた。
「お手を止めておいてください」
　読みの材料が何もない第一手（ショナ）は

賭けの対象からはずされる。
　八重子から見て右から一二三四五六の順にならんでいる目木には手を触れず、いきなりカミシタを明けた。根っ子の一。
「では、入れてください」
　合力にうながされて、盆莫蓙の上に公開している豆札を掌に戻した。わずかな色も読まれないように視線は茫と宙に漂わせ、半纏の中のかすかな動きからすこしでも注意をそらせるために、ぐっと胸を張って愛らしい乳房を誇示する。
「五つほど放ってください」
「こっちにも三つ」
　玉切れの客が貸元に声をかける。安岡の横に控えている若い衆が、あらためて盆莫蓙についた客の膝元へきちんと落ちるようにズクを投げていく。
　安岡が薄くほくそえんだ。これだけでも、友部に無理強いした甲斐があったというものだ。賭場での借金は良心的な貸元でもトイチ。十日で一割の利子。安岡組にいたっては、夕暮れにカラスがカアとなくたびに一割がつく。八重子の登場で二百万円ほどが放られたから、それだけで一日二十万円の利益だった。
「はいりました。張ってください」

合力の掛け声で、客の手が動き始める。最初ということもあって、張り額は小さい。
「はい、お手を止めてください」
「勝負！」
八重子はひと呼吸を置いて、目木に手を伸ばした。右から一二三四五六とならんだ札から四を取り上げて、右端へ動かす。カミシタも、もちろん四。
ぱらぱらっと張り方の札が開いた。
「シケンか。無難だが、それだけに当てやすいよな」
「麻雀のスジだしな」
「しかし、ショナが根っ子のわりにはおとなしい目だね」
「ま、一発目からドカンは親も子も無理さ」
豆札を納めて、つぎの勝負。
「奥で目が悪かったから、つぎは小戻りあたりかな」
「いや、それを読んでシケンを続けるとか」
「そりゃ、シロウトの手口だ。三々九度の縁談解消があったばかりじゃないか」
張り方同士は、出目を相談してもかまわない。どころか、『通り』といって、有卦ている張り方と同じ目に乗ることもできた。
「しゃけど、このお嬢ちゃんシロウトに……

毛は、もう生えとるんかいな」
　デパートの副店長が、妙な方向へ話題を振った。
「それを言えば、モジャモジャのボウボウだろうぜ。関八州とまでは言わねえが、このあたりじゃ有名な娘だ」
「おっぱいの魔力だけで勝っとるんちゃいまっか」
　ジャンスカ八重子の二つ名をもらって、もう半年ちかくが経っていた。七色八重子と言われることもある。出目が七色に変化するという意味だ。
　八重子が出した目は目木の二番目、小戻りの一だった。この目も、張り方の小勝ち。二連敗しても、八重子は無表情。五百万円が自分の金でないということも、ひとつはある。負け分は貸元が負担する。
　しかし平然としている理由は別にあった。親は０．５倍の有利を与えられている。偏らない目を出していけば、必ず張り方が読み過ぎで自滅するのだと、八重子は信じていた。
　読み過ぎ、あるいは欲目。勝ち進めば、自然と掛け金が大きくなる。そこで負ければ、結局は元の木阿弥。負けて熱くなって張り額を増せば、墓穴は八割がた掘られている。

八重子のつぎの目は、また小戻りの四。胴のちょい浮き。

そのつぎが、右から三枚目（サンゲン）の二。これは悪い目で、ほとんどの札が開いた。しかも張り額が膨らんでいた。

八重子は、できるだけ張り方の心理を読まないようにしている。海千山千の遊び人の心理を、十代の小娘に読めるはずがない。何かを考えれば必ずそれが顔に出て、逆に読まれてしまう。だから。つぎは同じサンゲン、しかもショナを含めて三回目の一だとか、だからこそ意表をつくのではないかとか、そういったことは（できるだけ）頭から追い出して札を繰った。

八重子がかすかに意識したと同じ思考過程をたどってか、それともまったく別の推論からか、張り方は二つに分かれた。四枚とも手元に引き揚げる者が何人もいた反面、大を開く者も少なくなかった。合計すれば、引き分けといったところ。

しかし、そこからの三回が八重子の面目躍如だった。目木で四枚目（シケン）は新目の三、続けてフルツキの五、そして大戻りの六。六は総掻きにちかい戦果だった。六通りの出目のうち、四点を張るのだ。ほとんどの札が

開かなかったというのは、張り方の推理が間違った方向へ一様に偏った結果だった。
「きつ過ぎるわ、この嬢ちゃん」
　副店長が悲鳴をあげた。
「一四一四とスジで来て、墓が行かんから新目の二。それが悪かったからいうて、なんで同じサンゲンの一なんや。そんで、順繰りに新目の連発。最後の六は、ありゃなんじゃいな。ふつうはひとつくらい目を殺して、いつ出すか出さんかの駆け引きに使うもんでっせ」
　勝手読みの典型だった。すでに説明したように、八重子は駆け引きなどしていない。偏りのない数列を出していっただけなのだ。しかし、それを人間の頭で考えるのは難しい。できるだけ偏りをなくそうと思えば、一のつぎに二は規則性がありそうだし、同じ一ではなおさらだ。かといって、一番離れた六にも意味がある。四は副店長が指摘したように、麻雀のスジにあたる。無難なのは三か五だが、これは一と同じ奇数だ。無難だから選ばれそうだと張り手が考えるかもしれない。ジャンケンで、自分はグーを出すと読んだ相手がパアを出してくると予測して自分はチョキにすると相手が考えるだろうから、こちらはその

裏をかいてグーで勝ちに行こうと……堂々巡りもきわまれりだ。
　では、偏りのない目とは――八重子が出した目を、小戻りとかサンゲンとか考えずにならべてみれば、答えはすぐに分かる。一四一四二一三五六……なんのことはない、ヒトヨヒトヨニヒトミゴロの語呂合わせで知られた２の平方根だ。八重子は、２から９９までの平方根を三十桁まで暗記している。円周率も、９９までの（意味はよく分からないけれど）対数も。数字が七以上の場合は、奇数の日にはそこから六を引き、偶数の日には六を足す。
「だいぶん熱くなってきました。しばらく休憩とさせていただきましょう」
　安岡親分が勝負を止めた。疲れた者は勝手に休んで勝負を続けるのがふつうだが、この状況では代わって胴に立ちそうな客はいない。八重子を休ませるための処置だった。
「では、休ませていただきます」
　きちんと頭を下げてから、八重子はジャンパースカートの肩を留めた。
　中庭に面した障子が大きく開けられて、熱気のこもった大広間に涼しい風が流れ込んできた。八重子は、若い衆が差し入れてくれたサイダーの壜とコップを持って、隅に控えて

いる介添え役の小池雄二のところへ行った。
「お、すまねえ」
　コップを受け取って、一気にあおる小池。大広間とはいえ、襖を閉め切ってカーテンまで掛けている。こんな真夏に背広を着ていれば、夜でも暑くて当然だと八重子は思う。
（ヤクザって、妙なとこで意地っ張りなんだから）
「女を金で縛るほど落ちぶれちゃいねえよ」
　友部親分に処女を捧げようとしてたしなめられたときのことを、八重子は思い出していた。二百万円は、友部親分から借りた金だった。けれど、借金の幾分かでも帳消しにしてもらおうとかいった、さもしい心根ではなかった。小学生の頃から父親に仕込まれていた手本引で借金を返すなどという無茶苦茶な申し出を快諾してくれたばかりでなく、賭場での作法を噛んで含めるように教えてくれたのは親分だった。そのうえ……
「筋肉の動きが見えるとか、手つきが半纏から透けて見えるとか、顔色に出るとか、そういったことじゃない。が、なんとなく雰囲気で出目の見当がつくのさ」
　親分は、八重子の出す目の四割を一点で言い当てた。三点張りなら、ほとんど百発百中

だった。そんなことができたのは友部組の中では親分だけだったが、鉄火場に一人でもそういう達人が紛れていれば、張り方が皆『通り』を掛けてしまえば、それまでだった。
「ま、女にゃいろいろと武器があるからな」
　片肌を脱いで乳房を露出するお色気作戦を伝授してくれた。
「恥ずかしがってる場合じゃねえだろ。妹の命が掛かってんだぞ！」
　ためらう八重子を怒鳴りつけ、ビンタを張って性根を据えさせてくれた。
　八重子は叩かれた頬を押さえるかわりにブラウスのボタンをはずした。シュミーズも右肩を抜いて、まだブラジャーを着けていない乳房を晒した。その姿で豆札を繰った。
　親分はそれまでと変わらず、茫洋とした（親分の言い方によると、気を散じて集める）目つきで八重子の仕種を眺めていたが……ほんの一瞬、まだ硬さが残っている乳房に焦点が固定されたのを八重子は感じ取っていた。
「小便臭え小娘にたぶらかされたなんて、認めるわけにはいかねえんだがなあ」
　親分は苦笑しながら、三点の張り札をめくって見せた。そこに八重子の選んだ出目はなかった。

八重子は、女として認められたことに悦びを感じたものだった。

「ぼつぼつ始めさせてもらいます」
若い衆が八重子のところまで来て声をかけた。
「はい」
八重子が立ち上がると、それを待っていたかのように、初っ端に大勝ちしていた男も立ち上がった。両手に二十ほどもズクを鷲づかみにして、ランニングシャツの上に羽織ったジャケットからも札束が覗いている。
三十を幾つも出ていないだろう。ポマードで七三に固めた髪の下で、タオルを額に巻いている。堅気には見えないが、ヤクザにしても雰囲気が崩れ過ぎていた。周囲から若旦那と呼ばれていることを知らない八重子でさえも、この男は放蕩息子のなれの果てではないかと判断した。
が――ヤクザであろうと放蕩息子であろうと堅気の商売人であろうと、それは八重子には何の意味もない。彼らは大金を鼻紙にも思わない連中なのだ。もっと露骨にいえば、こんな連中は仇敵であると同時に鴨だった。
若旦那は八重子の正面に座って、膝の前に

ズクを挑発的にならべた。
八重子の選んだ数列は、ラッキーセブンの平方根。ショナは二。
若旦那は四点張りできたが、天辺に本命を置いて、ほかの三点は一列にならべた。本命は三倍だが、あとはわずかなマイナスになる。破壊力と安全性を天秤に掛けた張り方だった。
「若旦那に半通り」
「こっちは、ひとつ」
二人の張り方が、若旦那と同じ目に乗った。ひとりは若旦那の掛け金の半額。もうひとりはズクひとつの最低単位で。
七の平方根の少数点以下第一桁目は六。若旦那は掌をかぶせるようにしてトマリの一枚をめくった。合力がズクのひとつを取って、釣りの四万円を返す。若旦那はそれを引き揚げて、掛け金に新しいズクを重ねた。
つぎの目は四で、若旦那はまたトマリ。つぎも手本引の流儀でいう新目の五。若旦那はトマリ。ここまでのところ、他の張り方も含めてジリ貧といった感じだった。
新目の一で、ついに若旦那の大が開いた。賭け金はそのままで、張った金額の二倍が若旦那の膝元へ放られる。若旦那に乗っていた張り客にも掛け金に応じた配当が投げられる。

若旦那は、勝ち分をそのまま上乗せしてきた。張り額は九十万円。サラリーマンの年収をはるかに超える額を張って、表情をちらとも揺るがさない。

表情を動かさないといえば――若旦那は他の張り方と違って、八重子を観察している気配がなかった。ほんのわずかな表情の動き、視線の向き、半纏の下の手の動き。そういったものには、まるで関心がなさそうだった。八重子が羞恥を殺して晒している乳房にも目を向けない。むしろ、他の張り方の動静をうかがっている感じだった。

ひとりだけが図抜けて張り額が大きいときでも、胴の意識がその張り方に集中するのは危険とされている。いろいろな考え方をする多人数の平均値を相手にするのではなく、一対一の勝負になるからだ。岡目八目とはよく言ったもので、他の張り方は胴の心理を読みやすくなる。しかし、八重子には当てはまらない。何手も先まで出目は決まっているのだから、ありもしない心理を読まれることなどない……はずなのだが。

つぎの目は五で引き分け。そこからが惨敗の始まりだった。一三一と立て続けに大が開いた。若旦那に六百万円ほど持っていかれ、

彼に乗った張り方にも百万円以上。勝ち分どころか、八重子の膝元にはズクが十も残っていない。一千万円以上あった胴が、あっというまに百万以下になってしまった。
胴がつぶれても、それは安岡組がかぶるのだから、八重子に金銭的な損害はない。けれど、友部親分に合わせる顔がなかった。
「大きな賭場に出入りするほどの腕じゃねえって、一度は断わったんだがな」
友部親分は、安岡組に八重子を行かせたくないと明言した。
「客の懐具合を超える金を高利で貸し付けたり、返せないとなると店を乗っ取ったりと、任侠の道を平気で踏み外してやがるような組にはな」
友部組の賭場では、融資は馴染みの客にだけ。それも『瞬間』に限っていた。つぎの勝負で勝てば返済。負ければ退散して金策に走る。深みにはまる前に娑婆の風に当たれば、頭も冷えてくる。
「嫌なら嫌って言ってくれ。本人が行きたくないって言ってくれりゃあ、どうあっても断わるから」
それでは、友部親分が兄貴筋から無用の恨みを買うことになりかねない。

「行きます」
　八重子は即答した。胴の額が大きいうえに切り取り放題と聞かされて、欲が動いたのは事実だった。
「代打ちなんでしょ。負けたとしても、それはあたしを買ってくれた安岡の親分に見る目がなかったってことですから」
　そうは言ったものの。いざ、敗北が目の前に迫ってきて初めて。そんな八重子に代打ちをさせていた友部親分も面目を失う結果になることに思いがいたった。
　友部親分の顔に泥を塗って、それでも友部組の代打ちを続けさせてもらうほど、自分は厚かましくない。もちろん、借金は身体を売ってでも返す。返すけれども――そんな手段で借金を返した自分を、親分は二度と振り返ってくれないだろう。
　友部親分は、女から銭を巻き上げることを厳しく禁止していた。情婦を囲うのはかまわないどころか、男の器量だ。ただし、手当てはきっちり出すべし。立ちんぼ（街娼）をチンピラから守ってやるのも縄張内の大切な仕事だ。しかし、稼ぎの一割以上の『後見料』は取るな。そんな潔癖な親分の前に立つには、自分もきれいな身体でいなくてはならない。

そんなふうに、八重子は思い詰めていた。
「若旦那、掛け金はそのままで行くんですか？」
形式だけといったおざなりな口調で合力が訊ねた。
胴が配当を払えなくなったときは分散といって、張り額に応じた比例配分となる。それでは間尺が合わないので、張り方は掛け金を減らすのが常道だった。
しかし若旦那は、前に九つ押し出したままでいるズクを軽く叩いただけで、引こうとはしなかった。つぎも九十万円を掛けるという意思表示だった。そして、初めて八重子に視線を正面から当てた。
薄い嗤いを浴びせかけられて、八重子は不安に駆られた。これまでに若旦那が大きく当ててきたのは三が一回と一が二回。そして、つぎに出す目は一なのだ。大で当てられれば、間違いなくつぶれる。
一を出せるなら出してみろ。若旦那がそう言っているように、八重子には思えた。
（変えようか？）
八重子は迷った。一を飛ばせば、つぎは〇だから出目は六を引いた四。そして、二六四五と、若旦那が大きくは当てていない数字が

続く。
　出目に理屈をつけるなら――これまでに当てられている一と三は外す。四五六はトマリで確実に当てられている。損はないけれど、儲けもない。出すとすれば二。しかし、それこそ相手の思うつぼだろう。
（駄目……一度でも迷ったら、癖になっちゃう）
　一度だけでも張り方の心理を忖度して数字を操作すれば、必ず二度目が来る。三度四度と重なれば、それでは小娘と海千山千との戦いになってしまう。
　これまでの開き方から見て、若旦那は天辺を薄目に張りつづけているらしい。それでも、八重子の出す一を当てる確率は三分の一だ。ここで当てられればつぶれるのだから、如何に怖い物知らずの小娘でも厚目を入れてくるだろうと――若旦那は読むかもしれない。
（読んじゃ駄目……！）
　八重子は身体の力を抜いた自然体を崩さずに、内心で自分を叱った。
（三分の一じゃない。千二百九十六分の一なんだから）
　大で当てられる確率は六分の一。三回続けてとなると、二百十六分の一だ。賽を三つ使

うチンチロリンになぞらえれば、ピンゾロの出る確率と同じ。ピンゾロくらい、ひと晩で何回かは出る。けれど、四つのサイコロが全部一になる確率は千二百九十六分の一。そんな奇跡が起きるはずはないと、八重子は自分を勇気づけた。

八重子は意を決して、一をカミシタに入れた。

若旦那は、そんな八重子の葛藤を知ってか知らずか、迷うふうもなくズクの隣に張り札をならべる。

「勝負！」の掛け声で、八重子はカミシタに手を伸ばした。

「うへえ、根っ子か」

「薄目を続けるなら二だと読んだんだがな」

そんな声の中、若旦那は悠然と張り札に手を伸ばした。天辺の札に手がかかった。

（やられた……）

目の前が真っ暗になるという表現が比喩ではないことを、八重子は知った。

「待った！」

闇にかすんだ視界の中で横から伸びてきた手が、若旦那の手首をつかんだ。

いつの間に動いていたのか、介添え役の小池が若旦那の斜め右後ろから身を乗り出して

いた。小池の動きにも気づかないほど、八重子は若旦那に気を取られていたのだ。
「妙な手つきで札をめくりますね。その手を開いてもらいやしょうか」
　掌に張り札を隠して、めくるときにすり替えているのだと、小池は暗に言っていた。
　若旦那は軽く掌を丸めたまま、動じた色はなかった。
「そりゃあ、まあ……開けといえば開きますがね」
「友部組の。他人様のショバで出しゃばった真似をしてくれるじゃねえか」
　安岡が、芝居がかってドスを利かせる。
「若旦那は、うちの組の大切なお客さんだ。お客さんに恥をかかせれば、ただじゃすまないぜ」
　客というよりは安岡組の身内だと公言したに等しい言葉だった。
　小池が、ぎょっとした表情で安岡を振り返った。若旦那の手口は、露骨に胴をつぶしにかかっている。安岡組の代打ちを安岡組の身内がつぶす。こんなおかしな話はなかった。
　小池は一瞬のうちに窮地におちいった。小池と一緒になってイカサマ師を追及するはずの貸元が、イカサマ師の側についたのだ。こ

うなると……安岡組の縄張りで、友部組の幹部が安岡組の身内にイチャモンをつけているという構図になってしまう。
　それがどれだけ大きなことか、八重子には理解できていなかった。ぽかんとして、二人のやり取りを聞いている。
「元より覚悟のうえです。さあ、掌を開いておくんなさい」
　小池としては、いまさら退くにひけなかった。
「あいよ」
　あっさりと、若旦那は手を開いて上向けた。そこには、何もなかった。
「……はめたな！」
　呻く小池に、若旦那はケッと吐き捨てた。
「俺にゃあ、そんな趣味はねえよ」
　小池は若旦那の右手をつかんだまま、未練ぽく天辺の張り札をひっくり返した。なんと、それは一ではなく二だった。
「ありゃあ、ならべ間違えたねえ。てっきり一を置いたと思ったんだけど」
　のほほんとうそぶく若旦那。対照的に、小池の顔はどす黒く染まった。
　片膝を立てて、八重子の膝元に置かれたカミシタをひったくると、その上で右手を開い

た。ズボンの後ろに差していた匕首を左手で抜くなり、右手の小指に刃先を当てた。
「ケチをつけて申しわけありません。これで勘弁してください」
　片膝立ちのまま右足を上げて、匕首の峰を踏み抜いた。
　ブヂッ……！
　血腥い音を立てて、小指が切断された。
「小池さん……！」
　何が起きているのか、ようやく理解の生まれた八重子が悲鳴をあげた。
「その潔さに免じて、これ以上は事を荒立てずにおこうか。いいですね、若旦那？」
　あっさりと安岡が引いた。ほっと息を吐く小池。しかし決着がついたわけではなかった。
「若旦那にアヤをつけたんだ。張り札が違っていても、配当は付けにゃなるまいよ。それは無論、そちらで持ってもらえるんだろうな」
　張り札が当たっていたとみなして、その配当の百八十万円を友部組で支払えという要求だった。
「……そのようにさせていただきます」
　小池はカミシタを引き裂いて片端を口に咥え、左手で器用に小指の付け根を縛った。
「不調法なところをお見せして、申しわけご

ざいません。これで退散させていただきます」
　小池は、八重子をうながして立ち上がろうとした。
「そりゃあ、聞けないぜ。友部組の」
　安岡の声が、再び怒気をはらんだ。
「てめえの都合で代打ちを降りてもらっちゃ困る。勝ち切るか、溶けちまうか、決着がつくまでつとめるのがスジってもんじゃねえのか？」
　小池は、はっとした表情になって安岡を見返した。若旦那に視線を走らせ、また安岡に向き合った。八重子は、小池の表情がいっそう緊迫したことに気づかない。
「ですが……ご覧のとおりの未熟者。そちら様のたってのご要望で出張らせましたが、やはり間違っておりました。責めは友部組が負います。どうか、今夜は勘弁して……」
「ゴチャゴチャ言うない。この場に出てきた以上、小娘といえどもトウシロウじゃあるめえ」
　小池の言葉を強くさえぎってから、安岡は表情をやわらげて八重子に視線を向けた。
「やってくれるね、お嬢ちゃん？」
「はい……！」
　反射的に八重子は答えていた。

本音を言えば、いますぐにここから逃げ出したかった。賭場でイカサマが絡めば血を見るとは、理屈では知っていた。でも、まさか自分の目の前で……。

けれど、ここで逃げ出せば。友部親分の顔に泥を塗るだけではすまない。百八十万円も損をさせてしまう。それに……若旦那の張り目は二だった。一二三。大の札は、やはり薄目の三点だ。つぎからは厚目が続く。すこしずつでも取り返せるはずだ――そう考えること自体が自分のスタイルから外れていることに、八重子は思いいたらない。

八重子は、盆莫蓙の前に座りなおした。

「おう。誰か、友部のを病院へ連れてってやんな」

しかし、小池は若い衆の手を振り払って若旦那の右後ろに腰を落とした。宣戦布告ともいうべき位置だった。

「自分は、お嬢の後見役で来ています。勝負が終わるまでは、この場から離れられません」

「だって……血が吹き出してる。死んじゃう！」

「なあに、一リットルや二リットルの出血じゃ命に別状ねえよ」

小池は、あらためて小指の付け根をきつく

縛った。
「余計なことは考えるなよ。お嬢の相手は若旦那じゃねえ。自分自身だ」
　そうだった。心理合戦に巻き込まれず、ただ無心に数列を――今は七の平方根を出していく。自分にできることは、それだけなのだ。
「後見の者がお見苦しいところをお見せして、申しわけありません。よろしければ、もうしばらく遊びにつきあってくださいませ」
　腹の底から声を出したつもりだったが、裏返ったソプラノだった。
　指を詰めたときにカミシタを敷いていても、盆莫蓙のそこここに血しぶきが散っている。若い衆がアルコールを持ってきて、三人がかりで清めた。
　若旦那は何事もなかったかのように座に付いて、新たなズクを盆莫蓙の上に押しやった。つられて、浮き足立っていた他の張り方も盆莫蓙に付いた。小池は若旦那の手元を凝視している。
「入ります……」
　八重子は左肩に半纏を羽織って豆札を繰った。けれど。鉄火場とはどういうものか。ヤクザとはどういう稼業か。初めて知った修羅場に、八重子の指は震えていた。

張り方の半数は見（ケン）を決め込み、残る者も半掛け――場においた金額の半分だけを掛ける形にズクを置いたり。図々しくもまだ若旦那に乗る者もいた。小池がなんと言おうと、実質的には若旦那と八重子の対面勝負だった。
「勝負！」
八重子はシケンの四を動かしてから、カミシタをめくった。
「え……!?」
八重子は、自分の目を疑った。カミシタの中にあった豆札は五だった。一泊の間をおいて、恐慌が八重子を襲った。
「ひ……」
出かけた悲鳴が喉をふさいだ。
唄いチガイ。無条件に胴の負け。張られた札に総付けだった。若旦那には、九十万円の掛け金を合わせて５．５倍。その他の張り方にも総額で二百万円以上。親のチョンボだから、比例配分にはならずに全額負担。手元の残りを差し引いて、五百万円以上の不足だった。見せ金までは、安岡組がかぶる。小池がイチャモンを付けた分は、友部組が背負う。しかし、これは……。

いったい、なぜ。自分はこんなところにいるのだろう。安岡組の貸切になっている旅館の二階で、八重子は呆然としていた。

唄いチガイで胴がつぶれて。小池は、まず旅館の帳場で電話を借りて、友部親分に一報を入れた。それから八重子に付き添われて病院へ行こうとして――安岡に制止された。

「お嬢ちゃんは、ここで待ってない。ヤクザ者が指を詰めただけなら、病院から通報があっても警察はいつもどおりに形だけの取調べで一件落着だ。けど、情婦にしちゃ若すぎる小娘が居合わせてみろい。痛くない腹まで探られちまう」

小池は何か言いかけて、ぐっと黙った。若旦那の役割が薄々見えてきた今となっては、小池はまったく安岡を信用していない。友部組に仕掛けられた罠ではないかとさえ疑っている。しかし、八重子を同伴することについては、安岡の言い分はもっともだ。それを押し切って八重子を連れて行くというのは、友部組は兄貴筋の安岡組を信用していないと、正面から喧嘩を売るに等しい。そんなことをしていいのは、友部親分だけだった。

「なあに。ちょちょいと傷口を縫うだけさ。すぐに戻るから、おとなしく待ってな」

ひょうげた言い草を残して、小池は安岡組の若い衆が運転する車に乗った。八重子に出来ることは、待つことだけだった。
（父さんのせいじゃないよね。もちろん、九美子が悪いんでもない）
父は腕のよい棟梁だった。仕事は真面目にこなしたし、博打に入れあげても生活費に事欠くところまではいかなかった。外に女を作ったりもしなかった――のか、どうか。すくなくとも、幼い八重子に気づかせないくらいの配慮はあった。
ただ。小学生の娘に麻雀や花札、チンチロリンから手本引まで教え込んだのだから、父親としては明らかに失格だった。
手本引の心理合戦とは、結局はジャンケンの先読みと同じではないのか。中学に上がってすぐ、八重子は看破した。父と父の配下の大工を相手に、覚えたばかりの円周率で（豆札はババ抜きみたいに引き抜いて）勝負して、八重子は圧勝した。
「おめえは、博打の天才だ。早く大人になって、勝ちまくって、俺に楽をさせてくれ」
その一年後に、父は普請中の屋根から足を滑らして死んでしまった。取り乱した母親を支えて裏から葬儀を仕切ってくれたのが、父

が常連だった賭場の友部親分だった。
心労で倒れたのは母ではなく、妹の九美子だった。詳しい検査で、心臓に先天的な欠陥が見つかった。それからは入院と退院を繰り返して、一家の生活はたちまちに逼迫していった。
中学を卒業した八重子は進学を諦めて、事務員として工務店に就職した。手に職を持たず八重子ほど算術に強くもない母は、日雇いの雑役婦くらいしか仕事がなかった。親子三人で暮らすぶんにはわずかばかりの余裕もあったが、九美子の入院費まではまかないきれない。母が水商売に沈んでいったのは致し方なかった。それでも春をひさぐところまでは堕ちぶれなかったと、八重子は母を信じている。
そうしてついに、九美子の退院の目処がつかなくなったとき。主治医は、かすかな希望をまとった圧倒的な絶望の事実を告げた。九美子の心臓は、持って数年。欠陥が著しくて、並みの心臓外科医の手には負えない。しかし……最後の希望にすがって海外からも患者が訪れるという、日本でただひとり『神の手』を持つ医師なら……健康保険の対象外である最先端の手術方式なら……百五十万円を用立

てられるなら。九美子が入院中の付添にかかる宿泊費や雑費まで合わせると……
「妹の命を救うのに、二百万円が必要なんです」
　八重子は友部親分の前に土下座した。
「無茶を言うねい」
　友部の返答は、至極もっともだった。
「おめえが身体を丸ごと売ったところで、五十にもなりゃしねえよ」
「売るつもりは、ありません。担保にしてください」
　八重子は頭を上げて、居住まいをただした。ハンドバッグから父の遺品の豆札を取り出して、友部の目の前で繰って見せた。片手で扱えるくらいには練習をしていた。
「親の出目は読めません。でも、自分が出す目を絶対に読まれない自信はあります」
　客として賭場に出入りするなら、せいぜいが回り胴だ。子のときに見（ケン）を続けるのは御法度ではないが、総スカンを食う。しかし幸いにも（不幸にも、というべきか）八重子は代打ちという仕事を知っていた。手本引にかぎって友部組の代打ちをさせてほしいと、八重子は懇願した。
「ふうむ……」

途方もない申し出に驚きながら、友部の瞳は悪戯っぽい光を宿していた。子分が呼び集められた。
「言っとくが、博打は遊びじゃねえ。ときによっちゃ命よりも大切な玉（ギョク）を、塵あくたのように使い捨てるんだ」
友部親分は、八重子の前にズクをばらばらっと放った。
「勝って返せれば良し。負けたときはどうなるか……その覚悟があるなら拾いな」
初めて耳にする、友部の厳しい声だった。
長い勝負なら、絶対に勝ちきる自信はあった。けれど、最初は運だ。いきなり大きく当てられたら、それまで。それよりも、たとえ二十万円でも三十万円でも、身を売ったほうが確実かもしれない――と、それは一瞬の気迷い。大金を塵芥のように使い捨てる連中から幾分かを掠め取るのと、自分を売り飛ばすのとでは、銭の性質がまるで違う。姉を犠牲にして生き永らえたと知ったとき、九美子はどう思うだろうか。
それに……こんな試験で大敗するようでは、しょせんはそれだけの運しか自分にはなかったということだ。
八重子は散らばったズクに手を伸ばした。

膝の前に積むと二十あった。百円札のズクだから二万円。
（水揚げの金額にしちゃ、ちょっと安すぎるんじゃないかな）
　そんな思いが、八重子の緊張をわずかにほぐした。八重子は豆札を握って、右腕を抜いたカーディガンの中に隠した。
「はいります……」
　七色八重子の誕生の瞬間だった。ジャンスカ八重子の異名を奉られるのは、それから二か月後の話になる。

２．処女花無惨

自動車が旅館の前に止まった。
（小池さん？）
窓の簾をかき上げて下を見ると、三台のタクシーだった。若い衆に見送られて、五人の客が去って行った。入れ替わるように、二台のタクシー。遠くにも屋根の行灯を点けたタクシーの車列が見えた。
壁の時計を見上げると、午前一時。お開きには早すぎる時刻だった。
階段を上がってくる足音。足音は廊下を遠ざかって、どこかの客間に吸い込まれていった。遠方からの客の宿泊だろう。朝にならなければ電車は走らない。
何度かひそやかな足音が繰り返されて――ドカドカと階段を上がってくる足音が入り乱れる。足音は八重子の部屋の前で止まった。襖が乱暴に引き開けられて、何人も子分を従えた安岡がはいって来た。
「まったく、とんだケチがついちまったもんだぜ」
八重子の前にたちはだかって、苦虫を噛み

つぶしたような顔で言い放つ。賭場が早々と引けたのは、小池が起こした騒動のせいだと言っているのだ。
　八重子は子分たちにぐるりと囲まれて、怯えていた。それでも、座布団から降りて畳の上に座りなおす礼儀までは忘れていなかった。
「ご迷惑をお掛けして……」
「唄いチガイのケツは、友部が拭いてくれるとさ」
　八重子の言葉に安岡がかぶせる。
「だから、算盤は合うわけだが……俺たちは商売人じゃない。面子ってものがある」
　この意味が分かるかと、安岡は八重子の前にしゃがみ込んだ。
「それは……」
　スジを通せと言われているのは、八重子にも分かる。しかし、具体的には……
「きゃっ……！」
　きっちり合わせた太腿の間に手を差し込まれて、八重子は悲鳴を上げながらその手を振り払おうとした。が、できなかった。子分に肩を押さえられ、腕を背後にねじ上げられた。
「安岡組の看板に釣り合うわけもねえが、せめては身体を差し出すのがケジメってもんだぜ」

「あ……あの……で、でも……」
　男に本気で迫られる、いや襲われるのは、はじめての体験だった。圧倒的な恐怖だった。しかも――不始末をしでかした自分に、この男を拒む権利があるのかどうか。そんな思いが、八重子を戸惑わせていた。
「手間取らせるんじゃねえ」
　安岡は浴衣の襟を両手でつかんで、むんずと割り開いた。
「いやっ……やめ」
　抗議の言葉は、頬へのしたたかな打擲でさえぎられた。反対の頬へも、手の甲が叩きつけられた。
「この期におよんで騒ぐんじゃねえ。てめえで身体を開けねえってんなら、開かせてやるよ」
　八重子は畳の上に押し倒された。子分が四人がかりで八重子の手足を大の字に開かせて押さえつける。
　安岡は上衣を脱いで八重子に馬乗りになった。腰を浮かしているので、八重子の身体に負担はかからない。けれど、心理的には凄まじい圧迫感だった。
「ほう……さすがに生きがいいな。仰向けになっても乳がつぶれねえ」

身体を起こしているときとほとんど形の変わらない乳房に、安岡の手がわざとゆっくり伸びる。
「やめてください」
左右に上体をよじって手をかわそうとしたが、子分に肩まで押さえられてしまった。
ぎゅうっと、強い力で鷲づかみにされた。安岡の手の中で、乳房がくびられて無残にゆがむ。
「痛い、やだあっ……誰か助けて！」
「静かにしろ。客に、まだ迷惑を掛け足りねえってのか？」
「じゃあ、その手をどけてください」
「聞き分けのないガキには、きついお仕置きがいるな」
安岡は、八重子の腰にどすんと尻を落とした。その重みに呻くひまもなく――付け根を指で穿たれてボールのように変形した乳房が、ぎりぎりと左右にねじられる。
「いやあああ……！」
唯一動きを封じられていない頭を左右に振って、八重子は痛みを訴えた。リボンがほどけて、長い髪が畳の上に散った。
「静かにしろと言うのが、まだ分からねえのか」

搾り出されるようにして勃ってしまった乳首が、抓られながら上へ引っ張られる。
「あぐ……ぐうう」
背中を反らすこともできない。八重子は悲鳴を喉の奥でこらえた。
「ふふん。すこしはいい子になってきたな。褒美をやろう」
すうっと腰の圧迫が消えた。乳首も激痛から解放されて、しかし、ころころと指の腹で転がされた。
「く、う……」
ぞわあっと背筋が総毛立つおぞましさ。それでも、拷問にも等しい痛みよりはずっとましだった。
ひっく……八重子はしゃくり上げて、ぐっと唇を噛んだ。いくら気が動転していたとはいえ、唄いチガイのような失態を、貸元の代打ちがしていいはずがない。男なら、その場で（小池さんのように）指を詰めているところだ。女だから、これで勘弁してもらえる。見た目は、なにも変わらない。堅気の世界に戻ることもできる。
（でも……）
身体を穢されてしまっては、もう友部親分の前には出られない。いや、それをいうなら

……唄いチガイの総付け、五百万だか六百万だかを友部親分がかぶってくれたとき、自分はその資格を失っている。
　つうっと、涙が顔をつたって耳たぶに溜まった。八重子は身体の力を抜いた。
「やっと観念したか。たっぷり愉しませてやるぞ」
「親分、それじゃケジメになりませんぜ」
「うん？　そうだな」
　ガハハと豪快な笑いを作る安岡。子分も追従で下卑た笑い。
　押さえつけられていた手足が自由になっても、八重子は大の字に仰臥したままの姿勢を続けていた。ショーツを乱暴に引き千切られたときも、ぎゅっと目を閉じて、されるがままになっていた。さっさと埒を明けて、部屋から出て行ってほしい。それだけを願った。
　もちろん、安岡にはそんなつもりなどない。膣におのれを突き立てて欲望を吐き出す。それで満足を感じるのは、せいぜい高校生までだろう。
　これからが本番だとばかりに、安岡はダボシャツも脱いだ。
「賭場で八百政の大将が、モジャモジャとか言ってたようだが、なかなかどうして。砂漠

のオアシスといった風情じゃねえか」
　八重子のそこは、すでに成熟の段階にはいっていた。ふっくらと盛り上がった大陰唇から、まだピンク色の小陰唇がわずかに顔をのぞかせている。秘裂の上端で突出する肉芽も、しっかりと存在を主張している。しかし発毛のほうは、かなり遅れていた。陰阜のあたりこそ繊細で短めの縮れ毛が肌を隠していたが、肝心の性器は丸見えになっていた。
　自分の身体を批評されて、気分がいいはずもない。けれど、不思議と腹は立たなかった。今まさに友部親分とのかすかな縁が決定的に断ち切られようとしているという事実以外に、八重子の心を動かすものなどなかった。
　安岡は左手で優しく乳房を揉みながら、乳首を口に含んだ。舌先で乳首を転がしながら、右手はツウッと腹を撫でおろす。あわやというところで右にそれて、大陰唇にすら触れずに鼠蹊部をくすぐり、Uターンして臍を軽く掘った。
　八重子はピクリとも動かなかった。感情を殺し自分を捨てた少女は、わずかなくすぐったさと、それに倍するおぞましさを感じているだけだった。
　男の右手が股間の突起に触れた。皮を指で

つまんで、にょるんと中身を押し戻す。
「ひ……」
　鋭い、はっきりとした鮮烈な感覚が腰の奥へ向かって放射された。感覚は背筋を伝わって、胸を下から突き上げる。
　この感覚が純粋な快感であることを、八重子は知っていた。中学に上がってすぐ、机の角に股間を押しつける愉しみを上級生から教わった。それはじきに、ガタゴト震える洗濯機にとって代わった。あるいは、母と妹と川の字になって寝ながら、両足首をきつく交差させて筋肉を突っ張って太腿を締める。そんな他愛ない悪戯だった。
「ふふん。さすがに効いているな」
　その声が、八重子を快感から引き戻した。ケジメのために与えられた罰。それに快感を感じては……なによりも、友部親分に申しわけが立たないと、八重子は思った。
　にゅるっにょるんと皮の上から中身をしごかれる感覚を、八重子は歯を食いしばって意識から追い出そうとした。けれど、淫核を刺激されるたびに身体がピクンと跳ねるのまでは、腰の奥が熱く潤んでくるのまでは、自分ではどうにもならなかった。
「俎板の鯉でも、もうちったあ暴れようって

もんだが」
　いまいましそうにつぶやいた安岡だが、堅気の何倍も女に接しているだけあって、はたと思い当たったようだった。
「てめえ、男に操立てしてるな？」
　言い当てられて、思わず八重子は目を開けた。面白そうに薄く嗤っている安岡の顔が正面にあった。
「相手は誰だ。小池か？　それとも堅気のやつか？」
　八重子は、ぷいと顔をそむけた。その仕種は、安岡の言葉を認めたも同然だった。
「言いたくなけりゃ、言わなくてもいいさ。だが……」
　やに下がっていた安岡の声が、かすかな怒気をはらんだ。
「俺にも意地がある。どうぞ抱いてくださいって、おめえの口から言わせてみせるぜ」
　あれを持ってこいと、安岡が子分に命じた。ひとりがあたふたと部屋を出て行って、すぐ戻ってきた。あらかじめ準備していた道具を取ってきたとしか思えない早さだった。
　安岡の言った『あれ』とは、縄だった。
「そこへ乗せろ」
　八重子は座敷机の上に仰向けに寝かされた。

「縛らなくたって、あたしは抵抗なんかしません」
　両手を頭の上へ引き上げられて、八重子は気丈に抗議した。腰の奥に生じた熱い潤いは、とっくに乾いていた。
「そんなつもりで縛るんじゃねえよ。すぐに分かるから黙ってろ」
　手首に縄を巻かれて、バンザイの形で座敷机の脚につながれた。膝から下が机からはみだす位置まで身体をずらされて、足も一本ずつ縛りつけられた。同じ大の字でも、目線を机の高さまで持ってこられると、奥の奥まで見られてしまう。そこに思いおよんで、八重子の青ざめていた顔にぱあっと朱が差した。
　そんな八重子の羞恥を煽るように。
「そらよっと」
　腰を持ち上げられ、机との間に折った座布団を差し込まれて、思いきり腰を突き出した姿にされた。手を縛られているのだから、隠しようがない。
「言ったろう。すぐに分かるって」
　安岡が小さなガラス瓶を開けた。白い軟膏のようなものが詰められている。それを指にすくって、八重子の乳首に塗りこめた。
（メ○ソレータムかしら？）

つうんとハッカの臭いがたちこめて、目に涙がにじむほどだった。
安岡の姿が八重子の視界から消えて。
「こっちもだ」
きゅろんと淫核を剥かれた。
「ひゃ……！」
剥かれた瞬間の妖しい感覚。そして、常は遮られている外気に晒される頼りなさ。
「やっぱりな。たっぷりとスマグメを溜め込んでるぜ」
安岡の指が淫核の付け根をぐるりとなぞると、白いおぼろ豆腐のようなものが指先にこびり付いた。その指先を八重子の鼻に突きつける。甘ったるく酸っぱい臭いに、八重子はむせた。
「豆だけじゃねえ。襞の奥もきれいにしとかないと、好きな男に愛想尽かしされるぜ」
安岡は八重子に見せつけながら、ちり紙に唾を吐いた。、
「やだっ、きたない……！」
そのちり紙で突起をぬぐわれて、八重子は鳥肌を立てた。それなのに、妖しい感覚が背筋をつらぬく。
（え……？）
思いきり剥き上げられている淫核を、冷た

く粘っこい感触でつままれた。先ほど開けた小瓶の中身だろうか。
「いや……いやあ」
　くりっくりっと淫核をひねりながら、軟膏が塗りつけられていく。軟膏のせいで淫核がつるっと指の中で回転するときの、凄まじい快感。八重子の拒絶の声は、切迫して甘やかだった。
「細工は粒々、仕上げをごろうじろって、な」
　安岡は、あっさりと座敷机から身をはなした。床柱にもたれて、悠然と煙草をふかし始めた。
　あのまま弄ばれていたら、じきに逝かされていただろう。そんな醜態をさらさなくてホッとしている反面、中途で放り出された恨みのような感情が八重子の心の奥底にわだかまっている。
（いったい、なにを企んでいるんだろう）
　安岡の意図が分からなかった。軟膏を塗られた三点の突起は、スウスウしている。いやらしい意味でなく、気持ちいい。縛られているのは苦しいけれど。
「あ……」
　安岡が煙草を吸い終わらないうちに、八重子はうろたえた声を漏らした。清涼感がだん

だん嵩じて、熱くさえ感じてきた。いや、痛いのかもしれない。ジンジンしてきて、トクントクンと心臓の動きが先端にまで響いてくる。
「あう、うう……」
　八重子は上半身を右に左にとよじったが、無意味だった。縛られた理由が、やっと分かった。もし両手が使えていたら、この熱く疼く突起を……どうしていただろう？
「なんとか……なんとかしてえ」
　乳首と淫核を間断なくさいなむ疼き。手首が縄で擦れるのもかまわず、八重子は上半身を左右に揺すり、腰をさらに高く突き上げた。
　安岡は煙草を吸い終わっても動かず、八重子のそんな狂態を面白そうに眺めている。安岡だけではない。座敷机を挟んで下座に控えいてる子分連中も、こちらはもっと性欲丸出しのぎらついた目で、八重子の悶える裸身を食い入るように見つめている。
「うああ……熱い、痛い……もう虐めないでください」
「虐めちゃあいねえよ」
　嗤いを含んだ安岡の声。
「極楽へ逝く手助けをしてやってるんだ」
「……」

ふざけないでください。小娘を寄ってたかって嬲りものにして、それが金看板を背負った人のすることですか。そう言い返したいのだけれど、もっとひどい仕打ちが待っているだけだ。少女の口からは、内心とはまるで異なった哀れな言葉がこぼれ出た。
「お願いですから……もう許してください。これじゃ、極楽じゃなくて地獄です」
「そうかい、極楽へ逝きたいってんだな？」
「……はい」
犯してくれと言ったも同じだと、八重子は観念した。しかし、安岡の目論見は、そんな生易しいものではなかった。
「いいだろう。願いどおりにしてやるぜ」
安岡はおもむろに動いて、八重子の横に座った。
「そんなに熱けりゃ冷ましてやるぜ」
八重子の胸に顔を近づけて、乳首にほうっと息を吐きかけた。
「ひっ……」
八重子の上体が、ぴくんと跳ねた。冷水を浴びせられたような感触。一瞬だけ疼きが消えて、鮮烈な快感が走り抜けた。
安岡は左右の乳首に交互に息を吐きつける。そのたびに八重子の身体が跳ねる。

「こっちもなんとかしてやろう」
　にゅるんと包皮がめくられて、至近距離から息を吹きつけられた。
「ひいいっ！」
　八重子の背中が反りかえった。
「そうかい、そんなに気持ちがいいのか」
　安岡が大きく息を吸い込んで、ふううううーっと強く長く息を吐いた。
「うあああ……ああ！」
　安岡の息が切れるまで、八重子の悲鳴も続いた。
「どうだ、すこしは冷めたか？」
「はい……ありがとうございました」
　安岡の意地悪い質問に、八重子は卑屈な返事をした。熱い疼きに責め続けられるよりは、不本意な快感を強制されるほうが、まだましだった。友部親分への思慕をみずから捨ててしまった少女は、調教師に鞍を乗せられた当歳馬とかわりはなかった。
　それでもなお、安岡はこのじゃじゃ馬を騎手の意図どおりに走るようになるまで調教するつもりらしい。右手に毛筆を持って、ぐったりしている少女の乳房に滑らせた。
　乳房をくすぐられて八重子はわずかに身じろぎしたが、抵抗のそぶりは見せなかった。

どんな刺激でも、突起の疼きを薄めてくれるなら歓迎だった。しかし、筆毛で乳首を包むようにして、くるんと回されると……
「ひゃうんっ……」
　身体が宙に浮いたのではないかと見る者に思わせるほど、八重子は激しく身体を振るわせた。性的な刺激を、電気が走ると表現することはあるが、これは――電気の爆発だった。快感の仮面をかぶった激痛が、脳天まで駆け抜けた。
「極楽が見えてきたろう？」
　安岡がうそぶいて、さらに乳首を筆先でくすぐる。
「いやだ……やだ、やめてえ！」
　立て続けの爆発に、八重子は恐怖を覚えた。
「まだ素直になれねえのか。ここは、弾けそうなほど膨らんでるぜ」
　そう言われて下目使いに自分の乳首を見て、八重子は自分の目を疑った。いつもは乳暈の中にひっそりと盛り上がっている乳首が、今は母のそれよりも大きくなって、ぱんぱんに張っていた。
「それとも、こっちはやめて反対もこちょぐってくれってか？」
　八重子の視界の中で、筆が左の乳首へ移動

した。
「あ、ひゃあっ……」
　全身が跳ねて、ふだんの五割増しくらいの大きさにしかなっていなかった左の乳首も、右と同じ大きさに膨れあがった。
「お願いです……どっちもやめてください」
　快感の爆発に翻弄されながら、どうにか言葉を絞り出して。八重子は、自分で自分の首を絞めたのではないかと思った。どっちの乳首も嫌なら――安岡は、そう言いかねなかった。けれど、それは取り越し苦労だった。
「そんなふうにしおらしくお願いされちゃあ、聞いてやらんわけにもいくめえさ」
　あっさりと筆を放り出して、床柱に戻る。
「おい、ビール」
　子分が一階へ走って、ビール瓶とコップを持ってくる。
（喉が渇いたなあ……）
　ぐびぐびと動く喉仏を眺めて、八重子は恨めしく思った。筆でくすぐってくださいと八重子が言うまで、安岡はこのまま放置するつもりなのだろう。
（そんなこと、絶対に言うもんか）
　すこし落ち着きを取り戻して、かすかに意地が甦ってきた。

（あれ……？）
　乳首の疼きが、いつのまにか消えていた。ぐっと頭を起こして自分の胸を見ると、心なしか乳首も（ふだんに比べれば倍以上もあるが）しぼんでいるようだった。あの筆に、どんな魔力があるのだろう。
「そうさ。気を逝かすと、タ○ガーバームの神通力は消えるのさ」
　タ○ガーバーム。それが、あの軟膏の名前だった。香港などで売られている筋肉痛や捻挫の薬で、日本のメ○ソレータムと同じようなものだ。ただし有効成分の含有量が違う。とくに、八重子を悩乱させているメントールは十倍ちかい濃さだった。
　ちなみに、安岡の言葉は嘘っぱちである。あらかじめ筆毛全体に振りかけてあったキシロカインの粉末が、強烈な局所麻酔の効果を発揮したに過ぎない。
　八重子は、そんなこととは夢にも思わない。安岡がどれだけ狡知で悪どい男であっても、今の言葉を疑う理由がなかった。むしろ、彼の正しさを証明するように……
「う、ぐう、う……」
　淫核の熱い疼きは消えていない。むしろ乳首の痛みが消失した分だけ、意識がそこに集

中してしまう。八重子の蜜壷は文字どおりに蜜を絶え間なく滴らせていた。なのに、快感は皆無。ひたすらに疼痛が八重子をさいなむ。それでも八重子がどうにか耐えていられたのは、刺激に対する免疫がつきかけていたのかもしれない。
「おうおう、凄い眺めじゃねえか。皮を突き抜けて、赤い鎌首をおっ勃てとるぜ」
　ちょいと冷ましてやれと言われて、子分のひとりが八重子の股間に顔を近づけた。包皮をめくり上げる必要もなく、そのまま息を吹きかける。
「ひゃあああっ……！」
　たちまち電気が爆発して、尾骶骨から脳天まで突き抜ける。子分が顔を上げたあとも、八重子の腰はぴくんぴくんと何度も跳ねていた。
　そうして。せっかく出来かけていた免疫を吹き飛ばされて。八重子はこれまでに倍する疼きにさいなまれた。
「ぐうう……熱い、熱いよう……やだ、なんとかして……」
　安岡はのほほんと、子分にビールを注がせている。
「お願いです、親分さん。筆で、筆で……」

　かすかに甦った意地なんか投げ捨てて、八重子は懇願した。
「筆でどうしてほしいんだ？」
「筆でくすぐってください」
「どこをくすぐってほしいんだ？　言わなきゃわからんぞ」
「お股の……親分さんが塗ったところを」
「さてね。どこだったかな。歳のせいか物忘れが激しくてな」
「だから、あの……お股の間の、チョンとなってるところを」
　突起という単語さえ思いつかないほど、八重子は追い込まれていた。
「なんだ、そりゃ？　ちゃんと名前で言え。乳首とか小指とか」
「……」
　沈黙は、羞恥心からではなかった。そんなものは、この熱い疼きの前には無力だった。淫核、実核、お豆、クリトリス。そういった単語を八重子は知らなかったのだ。耳にしたことはあったかもしれないが、意味を理解していなかった。かろうじて頭に浮かんだのは、小学生のとき、友達から聞かされた言葉だった。しかし、それを口にするのは、さすがに抵抗があった。

逡巡しているうちにも、疼痛はいよいよ燃えさかってくる。それは心理的なものだった。無限に苦しまねばならない血の池地獄に、ひと筋の蜘蛛の糸が垂らされている。どうあっても、八重子は蜘蛛の糸に取りすがらねばならなかった。
「……女の子のオチンチンです」
　かすかなつぶやき。
「あん……？　もっと、はっきり言え」
「女の子のオチンチンです！」
　やけくそになって叫んだ。
「女の子のオチンチンを、その筆でくすぐってください」
「……女の子のオチンチンか。たしかに、そうだな」
　くくくっと安岡が嗤った。子分たちもお追従ではなく、どっと笑った。
「よしよし。お嬢ちゃんのたっての頼みとなりゃあ、いたし方ねえ。女の子のオチンチンをかわいがってやろう。女の子のオチンチンをな」
　安岡が立った。手にしているのは、さっきとは別の筆だった。八重尾子は恥ずかしさで顔をそむけていたが、筆をみたところで、違いには気づかなかっただろう。

八重子は目を固く閉じていた。そむけた顔の向こうには子分たちが陣取っている。彼らを視界から追い出すには、そうするしかなかった。
暗闇の中で、刺激は不意打ちだった。幼児の小指くらいの大きさに増大して包皮から飛び出ている淫核。その裏側をすうっと逆撫でされて、闇が火花に埋めつくされた。
「ひぎゃあっ……！」
獣じみた咆哮が、喉から迸った。これまでにない高さまで腰が跳ね上がり、手首にぎりぎりと縄が食い込む。力いっぱいに突っ張った脚が下へずれて、縄が脛を傷つけた。それらの痛みを八重子はまったく感じていない。足の指が反って、そのまま止まる。
「あがああーっ！」
再び撫で上げられて、また八重子が吼えた。腰が何度も跳ねて、八重子を拘束している座敷机がギシギシ軋んだ。
「はあ、はあ……ふう……」
絶頂に達した直後に、さらなる高みへ追い上げられたのだから、これは快感とか逝くとかいうより、色責め地獄だった。しかし、もう一度地獄を見せてやろうかと訊ねられれば、八重子はおそらくうなずいていたのではなか

ろうか。
　安岡はそんな手間ひまはかけずに、今度は子分たちに腰を押さえつけさせてから、淫核の先端にぐるりと筆を巡らせた。
「ふひゃあん……」
　刺激が弱かったのか、鼻にかかった歔き声だった。が、二度三度とぐるぐる筆を巡らされるうちに、歔き声は悲鳴に変わっていった。
　たっぷりと歔かせてから、安岡は包皮を下までめくった。その感触は、八重子にも分かった。
（え……？）
　根元から先端まで、慎重に狙って穂先を滑らせる安岡。
「ぎゃん……ぎひいいいいいーっ！」
　どことなく牝狼の遠吠えを思わせる、荒々しくも物悲しい悲鳴だった。遠吠えを終えて、八重子の全身から力が抜けた。
「叩き起こしやしょうか」
「スケをコマすのに急いじゃいけねえ。それよりも、な……」
安岡はタ○ガーバームの瓶を開けて、人差し指と中指を突っ込んだ。その二本の指で、八重子の小陰唇と膣口を弄んだ。
「これで、嫌でも飛び起きるって寸法さ」

「まったく、親分は女の扱いにかけちゃ天才ですね」
「馬鹿野郎」
　安岡はたしなめたが、目はやに下がっている。
「俺は諸芸百般。悪だくみにかけちゃ、なんでも来いだ」
　また床柱を背負って、面倒だとばかりにビールをラッパ飲みする。
「とはいえ、お嬢ちゃんは余禄もいいとこだな」
「六百二十もでしょ？」
「ああ。小池とかいうのが勇み足をしてくれたのは計算どおりだったが、まさか土壇場で唄いチガイをしてくれるとはな」
「すんません、おいら頭が悪いもんで。本来なら百八十だけじゃないすか。あんだけの仕掛けで、それこそ算盤は合うんですか？」
「ほんとに頭が悪いな。百八十が百だってかまわねえんだ。弟分の友部組が安岡組にイチャモンをつけたってえ、そこが肝なんじゃねえか。手打ちじゃ、うちと縄張が接している来島町をいただく。うちの流儀で絞り取りゃあ……」
「そういうこった。さすがは若頭だけある」

一千万円以上の実入りになるのか、圧倒的な勢力差が生じて、じきに友部組を併呑できるのか。そこまで解説させることはなかろうと、安岡は話を引き取った。
「お、目を覚ましましたぜ」
八重子が目を開けて、ぼんやりとあたりを見回していた。まだ絶頂の余韻があとを引いていて、自分がどこにいるのかさえ分明でなかった。しかし、意識がはっきりしてくるにつれて。
（え……？）
股間が異様に熱く疼いていた。それも一点だけではない。全体が燃えるように熱く疼いていた。いや、はっきりとした痛みだった。
「親分さん……」
八重子は泣き声になっていた。
「熱いのが、まだ治まってない」
「そりゃあ、まだ逝き方が足りねえんだな」
安岡がけろりと大嘘を吐く。
「中途半端に火をつけちまったから、マンコ全体が燃えあがっちまったんだな」
「そんな……どうすれば？」
「わかりきったことじゃねえか。筆みたいにチマチマした道具じゃなくて……」
安岡が立ち上がって、ズボンを下ろした。

巻き寿司ほども太さのある肉棒が、そこに聳え勃っていた。
「こいつでマンコを内側から掻くしかねえよ」
　どうぞ抱いてくださいと、言わせてみせる――記憶の底から、安岡の声が響いてきた。こういうことだったのかと、八重子は惨めな気持ちになった。けれど、痛みは一分ごとに増していく。
「お願いです、親分さん。抱いてください」
　安岡は腕組みをして八重子を見下ろしている。八重子の位置から見ると、水爆実験のキノコ雲みたいに傘の張った亀頭が、安岡の顔を隠している。
　女の子のオチンチンのときと同じだと、八重子は悟った。もっと具体的にお願いしないと駄目なのだ。
「親分さんの……オチンチンで、あたしの、あたしのマンコを……内側から掻いてください」
　何度もつかえながら、八重子は破廉恥きわまるお願いを口にした。
「そうかい。そこまで頼まれちゃあ、きいてやらんけりゃなるまいよ」
　安岡は顎をしゃくって、子分たちに八重子

の縛めをほどかせた。
「そこに寝な」
　いつのまにか、座敷机の隣に布団が延べられていた。
「仰向けになって、膝を抱えろ」
　それでは、性器を天井に向けて晒してしまう。縛り付けられて大の字にされるのと、自分の意思で恥ずかしいポーズをとるのとでは、まるで意味が違う。
　自分から進んで大の字になっていたときの意地と覚悟は、とっくに失われている。それでも八重子は、羞恥に悶えながら命じられた姿勢になった。言われたとおりにしなければ、この疼痛地獄から解放してもらえない。という諦めだけでもなかった。筆よりもずっと激しい逝き方をさせられるというのだから――怖い物見たさの期待がまったくなかったといっては嘘になる。
「そうじゃあねえ」
　両腕でぎゅっと抱いている膝を、安岡は大きく割り開いた。
「いやあ……」
　弱々しく抗議したが、取らされたポーズは崩さなかった。
　安岡はコンドームをおのれの太い肉棒に苦

労しながらかぶせた。それをちらっと盗み見て、八重子は安堵した。妊娠という最悪の結果だけは避けられる。自分を徹底的に追い詰めて虐めている男に、感謝の念さえ湧いてきた。
　もちろん、安岡は避妊のためにコンドームを使うのではない。刺激物を塗りこめた性器に抜き身を突き刺せば、自分も朝までのたうちまわる破目になる。それを避けただけだった。
「さて、開通式といこうか」
　安岡が八重子にのしかかる。右手を陰茎に添えて真珠（実は、刑務所で歯ブラシの柄をくすねて作った玉）を三つも埋め込んだグロテスクな亀頭を少女の膣口にあてがった。
「むん……！」
　ぐいと腰を沈める安岡。
　メントールの刺激で蜜を強制的に絞り出されていた八重子の性器は、ジュブッと音を立てて安岡を迎え挿れた。が……
「痛あああっ……！」
　八重子は肉体の感覚として――ブチッと、おのれの一部が引き裂かれる音を聞いた。
「くううう……締め付けがすごいぜ」
　これ以上はないほどに奥深くまで一気に八

重子をえぐって、安岡が喜色満面に呻いた。
「ぐうう……」
　必死で痛みに耐える八重子の呻き声が重なる。ただでさえ巨根の安岡。そこに埋め込まれた珠まで受け挿れるのは、処女には苛酷に過ぎる試練だった。
「むんっ……！」
　八重子の苦悶には頓着せず、腰を引いて、再び深くえぐる安岡。
　ジュブッ……
「ひい……！」
　痛ましい淫らな音に、八重子のかすかな悲鳴が重なる。
　ジュッポ、ジュッポ、ジュッポ……安岡の腰が律動する。
「いや、いやあ……痛い、痛い！」
　安岡は少女の両脚を肩に担ぎ上げて、いっそう激しく腰を突き挿れた。その動きに合わせて、少女の身体も上下に揺すぶられる。
「ひぐっ……ひぐっ……ひぐっ……」
　突き挿れられるたびに、しゃっくりのような悲鳴をこぼしながら。八重子は、メントールによってもたらされる灼熱の疼痛からは解放されていた。それほどに、処女を散らされる痛みが厳しかったというだけのことだった

のだが。
　ゆっくりと秒針が三度巡って。安岡の動きがゆるやかになった。これで破瓜の痛みからもタイガーなんとかの疼きからも解放されるのだと、八重子は安堵した。
　安岡は八重子の腰を抱いて身体を後ろに倒した。いきおい、八重子は下半身がつながったまま、男にまたがる形にされた。
「まだ、痛痒いのは鎮まってねえだろ？」
　安岡の言うとおりだった。安岡に引き裂かれつらぬかれる痛みにすこしだけ慣れてくると、熱く疼く感覚が鮮明に甦ってきた。
「でも……内側から掻いたら消えるって？」
「たっぷり掻いて気を逝かせれば、な」
　痛がるばかりで、ちっとも逝ってなかったじゃないかと、安岡が言う。処女にいきなり性交で絶頂に達せとは、無理難題もいいところだ。
「どういうふうにするか、だいたいは分かったろ。今度は、自分で好きなように腰を振ってみな」
　八重子が戸惑っていると、安岡は両脇をつかんで引き寄せた。親指を乳首にあてがって指の腹で弄びながら、八重子の上体を持ち上げた。八重子の腰が浮くと、ぐいと押し下げ

る。グジュッという湿った音とともに、破瓜の鮮血があふれ出た。
「あ……ひい……」
身体を揺すられるごとに、八重子の息に小さな悲鳴が混ざる。
「その調子で、自分で動かしてみな」
八重子は、おそるおそる安岡の言葉に従った。さからえば、もっと非道い目に遭わされるだけだ。八重子は歯を食いしばって、自分で自分にさらなる苦痛を与えた。
腰を浮かすと、ニュグウッと肉棒が抜けていく感触。腰を落としていくと、ググウッと内臓が押し上げられる。
「んむむむ……ぐうう……」
動きを繰り返すうちに、八重子の全身が脂汗にまみれていく。
（こんなの、痛いばっかり……）
それでも八重子は安岡の大嘘を疑いもせず、腰を振りつづけた。
「そんなんじゃ駄目だ。チョンチョンと浅く出し入れしたり、深く咥え込んでから腰をぐりぐり回したり、壷全体を掻きまわせ」
命じられるままに、八重子は大きく腰を浮かす。ニュポンと音を立てて醜魔羅が抜けた。その付け根に左手を添えて、ぐうっと腰を沈

める。ジュブジュブと少女の股間に埋まっていく陰茎。
「はああ……」
　巨根に押し出されたような、少女の吐息。
　八重子は、安岡の肩に手をついて腰で『の』の字を何度も描いた。三分の一ほど抜いて、今度は逆回転。
　どんなふうに動かしても、股間の熱くて痛い疼きは消えなかった。自分で自分に与えている痛みがつのるばかり――もしかしたら、安岡に騙されているのではないか。ちらっと考えた瞬間、八重子は呪縛から解き放たれた。
　八重子は横ざまに男の身体から転げ落ちて、布団に突っ伏した。
「うわあああ……」
　大声で泣いた。行為の虚しさ。強制されてとはいえ、淫らで破廉恥な振る舞いに没頭していた情けなさ。友部親分にかけた迷惑。抱いてもらう資格を失った悲しみ。何もかもが、一気に堰を切った。
「なにを、いきなり……？」
　八重子の激しい感情の動きを理解できず、安岡は舌打ちをした。
「盛り上がってるところに水を差すんじゃねえ」

言葉とは裏腹に、その醜魔羅はいきり勃ったままだった。
「そらよっ……」
安岡は強引に八重子を仰向けに返して、両脚を肩に担いだ。
「やだ、もうやだ……」
八重子は抵抗しなかった。おのれの非力さに、しゃくり上げるだけだった。
無知な少女をからかって踊らせることに、安岡は飽きてきたのだろう。あるいは、手放しで泣かれて興醒めしたのかもしれない。少女をつらぬくと、これまでにない激しい動きで小さな裸身を翻弄して、すぐに果てた。
安岡の醜い肉棒がいっそう太く張り詰め、びくびくっと脈動するのを、八重子は腰の奥で感じた。これで終わったのだと、八重子はほっと息を吐いた。しかし、ここはまだ地獄の一丁目だった。
「壊さねえ程度にしとけよ」
そそくさと身づくろいをした安岡が、子分に釘を刺してから部屋を出て行った。四人の子分は部屋に残って、八重子をぎらついた目で見下ろしている。
「いやだあああっ！」
彼らの意図を察して、八重子は金切り声を

あげた。
「やだ、やだ！　誰か助け……ムグゥ」
　口を手でふさがれて、八重子は必死でその手に噛みついた。無駄な抵抗がどういう結果をもたらすか、考える冷静さはなかった。
「てめえ、このアマが！」
　バシン､バシンと力まかせに頬を張られた。千切れて部屋の隅に投げ捨てられていた自分のショーツを口に突っ込まれた。
「ぶぐう……」
　吐き出す前に、手拭で口を割られて猿轡を噛まされてしまった。
　それでも八重子は、つかまれた腕を振り解こうとして渾身の力でもがいた。正面から近寄る男は、足で蹴飛ばした。
「なんてえジャジャ馬だ」
　若頭が辟易したように吐き捨てたが、諦めるはずもなかった。二人がかりで背中にねじ上げた手首を重ねて浴衣の帯で縛り、首にまわしてからいっそう高く腕を吊り上げた。
「ぐふっ……」
　息を詰まらせて、八重子は顔をのけぞらせた。その隙に足首をつかまれて、左右に割り広げられ――胡坐を組むような形に膝から下を重ねて縛られた。安岡親分が置き去りにし

た縄を勝手に使ってはいけないのだろう。八重子の足を縛ったのは、子分のひとりが締めていた六尺褌だった。長く余った六尺褌は背中に通されて、手首につながれた。
　肩の痛みをかばって手首を下げると、あるいは羞恥から腰を引くと、喉が厳しく縊られる。
「うぶ……ぐぎい……」
　息をするには、すこしでも下肢と手首の距離が縮まるように、仰臥して腰を高く突き出した姿勢でじっとしているしかなかった。四人の飢えた鬼どもに、破瓜の血にまみれた股間を見せつけながら。
「親分と穴兄弟になるのは、何度目かな」
　若頭がコンドームを装着しながら、悪びれたふうもなくうそぶく。
「こんなチンピラまで兄弟分にしてもらって、恐れ多いこってす」
　いちばんの下っ端がふざけながら、目だけは血走らせている。
「それじゃ、まあ。一番槍……じゃねえ、二番槍といくか」
　若頭が下半身を丸出しにして、八重子にのしかかった。
「ぶばあ……ばば、ばべ……！」

頭を右へ左へと振りたてて、くぐもった声で叫ぶ八重子。少女の地獄巡りは、まだ始まったばかりだった。